

「息が苦しい」 そんな症状は漢方でよくなるかもしれないですよ。Vol.2」

附属東洋医学研究所

助教 岡林麻子

教えて！！漢方&鍼灸



「息が苦しい」 そんな症状は漢方でよくなるかもしれないですよ。Vol.2

「息が苦しい」という気が鬱滞する「気鬱」という状態では、興味深いことにしこりや痛みを訴える方もいます。「喉のしこり」「お腹のしこり」「胸や脇の違和感・痛み」これらはいずれも気がのどやみぞおち、またお腹に鬱滞したことにより生じます。もちろん西洋医学的に画像検査や生検などが必要な場合は行いますが、いずれも各種検査では異常がない場合、漢方で症状が気にならなくなることが多いです。

気鬱の症状にはよくある症状として「胸や喉がつまった感じがする」というものがあります。西洋医学的には咽喉頭異常感症(いんこうとういじょうかんしょう)とされています。現代はストレス社会とされていますが、こういった症状は最近出てきた病気ではなく、2000年近く前から治療してきた記録があります。

気鬱の代表処方として半夏厚朴湯があります。半夏、厚朴、茯苓、蘇葉、生姜の5つの生薬で構成され、気の鬱滞に作用する半夏、厚朴、蘇葉が入っています。これは3世紀(200~210年)頃に張仲景(ちょうちゅうけい)によって『金匱要略(きんきようりやく)』に記載されており、「婦人、咽中(いんちゅう)、炙癭(しゃれん)有るが如き(ごとき)は、半夏厚朴湯之(これ)を主(つかさど)る。」つまり「のどに炙った肉の切れが付いているように感じる者には半夏厚朴湯の主治である」と言っているのです。婦人と女性に限定されているかのようにですが、もちろん男性にも使います。



また「梅核気(ばいかくき)」という表現もあり、これは「梅の種子がのどにひっかかって、吐き出そうとしてもでず、飲み込んでも下がってこない感じ」のことです。昔の書物は例えば具体的に面白く、独特なものもあり、とても印象に残りやすいです。当時の患者さんから聞いた表現をそのまま記し当時としては普通の表現だったのか、もしくはあえて記憶に残りやすいように考え書き記したのでしょうか。

また昭和の有名な漢方医である大塚敬節(1900~1980年)によるとお腹にガスがたまっているもの、なんとなく腹が張って塊が動くもの、心臓のところにハンカチかなんかを丸めたものがくっついている、こういった症状にも半夏厚朴湯が効くと記載があります。冒頭でのしこりや違和感、痛みといったものはまさしくこのことで、昔からこういった症状を、現代のように血液検査も画像検査も何もない時代の医師たちが、漢方を使って治していたことは目を見張るものがありますね。

気が鬱滞するだけで、前回お示したような食思不振、不眠、動悸、便秘、頭痛、めまい、耳鳴り、倦怠感といった体の不調から、今回のようなしこりまででてくるなんて、人間の体は複雑で、そして繊細です。東洋医学にはココロとカラダはつながっている「心身一如(しんしんいちによ)」の考えがあり、ココロを整えることでカラダ全体が巡ったり、また逆にカラダを整えることでココロが巡ったり、漢方ならではのと言えます。「気にし過ぎ」はもちろんよくないですが、「気のせい」「気の持ちよう」と自分の症状を蔑ろにせず、大事にしていきたいですね。

次回は「漢方薬は感染症なしでは語れません(前編)」です。

